





六日目追加 HO  
スミレ







体を動かしていればなにも考えなくてすむ。  
それは、屋敷にいるときに学んだことだった。  
どれだけつらい思いをしても、体さえ動かしていれば  
その間は思考から逃れることができる。



土砂をかきわけ、木々をどかして、道を開いていく。  
小さな傷ができては消えて、痛みにも慣れてきた。  
しかし、いくら体を動かしても、結局思考は消えてくれない。

魔女のこと、マリーのこと、<sup>あざ</sup>痣のこと。  
マリーの肩にあった痣は、屋敷で会った魔法使いにもあった。  
まったく同じ形で同じ箇所に痣ができるなど、本来なら考えられない。  
けれど、それが魔法や神秘の力であるというのなら話は別だ。  
たとえマリーがどんな言い訳を重ねたとしても、肩の痣がある限り、魔法に関係していることは間違いなかった。

彼女が僕にかけられた魔法を知っても態度が変わらなかったのは魔法の関係者だから？  
僕を気にかけていたのも罪悪感などの感情からだった？  
——いや、僕の魔法のことを知らないときから、彼女は  
ずっと親切で、ずっと丁寧に接してくれていた。







僕はマリーがジーナに似ているから、ここまで打ち解ける  
ことができたのだろうか？

——いや、あたたかい食事をくれて、画材も与えてくれて  
たのは他の誰でもないマリーだ。

そして、魔法にかけられた僕をはじめて人扱いしてくれた  
のは、マリーだった。

僕はそれがとても——うれしかったのか。

人が憎い。

そう思っていたけれど、マリーと過ごしたあたたかな日々  
は、変わらない事実としてここにある。

魔法を扱う者は長生きだという。

僕にかけられた魔法もそれに類するものだ。

もしかしたら僕たちは、長いときをともに生きていけるの  
だろうか。

けれども、魔法使いに対して思うことがないわけではない。  
僕に魔法をかけた魔法使いと彼女は別人だとわかっている  
けれど。

魔法を扱う者が憎い。

屋敷にいたときからそう思っていたのも、事実だった。

考えては浮かんで消えていく。

思考がうまくまとまらない。

このまま作業を続ければ、日が昇るころには道が開く。





僕の役目はそれで終わる。

道が開いたら一人で去ることもできる。

ふもと  
麓へおりて、人ではない僕が人に囲まれ暮らしていく。

そんなことができるのかは、わからないけれど。

魔法について話さなければいい。

傷が治るところさえ見られなければいい。

それともこのまま、マリーとともに過ごしていく？

たった数日、一緒に暮らしたただけだ。

しかし彼女と過ごした日々は、今までとは比べ物にならないほど穏やかなものだった。

彼女に料理を振る舞い、隣で絵を描いて、笑い合う。

たとえ彼女が魔女になったとしても、僕がともにいたいと望めば、その日々はずっと続いていくのだろうか。

僕は――。

## 選択肢

1.一人で去る

2.マリーとともにいる

シーンを進めるとココフォリア上に選択肢が表示されるので、  
自身の選択を左クリックしてください。

